

むかし、旅の薬屋が、とうげまで来て日がくれてしまいました。こまっていると、家が一軒あったので、戸をたたいて、

「ひとばん、泊めてもらえませんか」とたのみました。すると、男の人が出てきて、

「ああ、ちょうどいいところに来てくれた。だれか来てくれないかと、待っておったところだ。泊まっていってくれ」といいました。

そこで、薬屋が中に入ると、男の人が、

「じつは、いま、うちのおかみさんが死んで、これから村まで知らせに行かなくてはならないんだ。すまないが、留守番してもらえないか」といいました。薬屋は気味が悪かったけれど、「それなら留守番してあげるけれど、早く帰ってきてくれ」といって、ひき受けました。

男の人は、いそいで出かけていきました。

薬屋は、いろいろばたにすわりました。見ると、となりの座敷に、なくなったおかみさんがねかせてありました。まくらもとには、おせんこうとまくらめしがそなえてあります。そのうち、おかみさんのふとんがごそつと動きました。

薬屋が息をころして見ていると、ふとんの中から白い小さな手が出てきて、まくらめしをつかんだかと思うと、またふとんの中に引っこみました。薬屋はおそろしくて、がたがたふるえだしました。そこへ、やっと男の人が帰ってきました。

薬屋が、

「おかみさん、死んでなんかいないぞ。ふとんの中から白い手を出してごはんを食べてたぞ」というと、男の人は、

「ああ、いっておくのをわすれてたよ。子どもが、なくなった母親からはなれられないで、いっしょにねてたんだ」といいましたとき。

おしまい。

* まくらめし 死んだ人のまくらもとにそなえるごはん